

転生したら天災(♂)
だつたし一夏は一夏
ちやんだしハーレムフ
ルチャンyanけ！！

佐遊樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

T S 束に原作知識持ちオリ主が転生憑依した結果爆誕した白い束が主人公の物語で
す。

一夏ちゃん流行つてて書きたかつた。

全三話です。

※IS最新刊までのネタバレあります。

※2018/5/4/20:25完結しました。推薦もいただきました…！ 皆さま

ありがとうございました！

序：天災の条件
破：天災の絶望
急：天才の末路

目

次

61 27 1

序：天災の条件

00 : Introduction

——篠ノ之束は天才である。

それは自他ともに認める事実だし、細胞単位でオーバースペックな彼女におよそできないことはない。

最大の功績として挙げられる『インフィニット・ストラトス』^{（イフ）}の開発なんて齢14にして成し遂げているのだ。14歳つてあれだぞ、中二だぞ。俺が中二のころなんて自分に秘められた特殊な能力の設定を考えるのに忙しかつたぞ。その間に空飛ぶ激ヤバ兵器を造るつて、そりやあ天才だよ。あるいは天災。

で、第一の問題は俺がその天才になつているということ。

それだけじゃない。

第二の問題がここに提示される。

俺が前世と言うべきであろう記憶の中で読んでいたライトノベル——『IS——インフィニット・ストラトス』の中では、篠ノ之束は確かに女性であつたというのに。何を隠そう、現在10歳児である俺こと篠ノ之束は、間違ひなく男である。

01：天才少年オーバースペック・ボーイ

小学校に通う俺は、夏休みの宿題を初日に全て終わらせたのをいいことにリビングでごろごろしていた。

キッチンで母さんが夕飯の準備をしている音が聞こえる。確かに今日はそうめんだったはずだ。父さんは道場に行っている。このご時世に剣術道場一本で食つてるのはすげえよ。素直に。いや母さんもパートしてるけどさ。

10年の間に、とりあえず身体のスペックは確認できた。何でもできる。いやホントに。

筋肉がどう動いているのか自分で分かる。人の目の動きから深層心理まですべて読み取れる。

一度目には二度と忘れない。咄嗟の反射行動スピードが常人の限界を超えた

ている。

テレビでアスリートの動きを見れば、それを勝手に脳が分析し自分の身体に最適な動き方でトレースする。初めて見る論文の内容を理解できるだけでなく、要旨を抽出しきみ碎いて再構成することができる。

できないことはない。何もない。

こりや人生飽きて人格破綻者になるわけだよね。

しかし幸いなことに、今の篠ノ之東はその生来のスペックを維持しつつ俺という凡人の思考回路を有している。そのギャップによる弊害は現在まで感じられない。つまり人格者の天才が爆誕したわけだ。

——いわゆる『白い束』である！ 無敵！ ハイパー・ムテキだよこれ！

生まれた時から自我があつたわけじやないが、幼稚園に入るころには既に俺という人格は成立していた。もう細かいことを考えたくはないので、篠ノ之東＝俺である、と自分ではケリをつけている。なんだよ転生したから身体の元々の意識が云々うつて、あほらし。俺は俺だ。もうどうにもできん。ここに存在する以上誰も俺の存在を否定することはできない。

ならば篠ノ之束として生きていくだけだろうに。

幼稚園、小学校と順調に進んできたが、なんと筈は女の子である。ちょっと全キャラT Sに対して身構えていたのでホツとした。乙女ゲー世界に転生とか男サイドだたら絶対嫌だよ。

今はまだ2歳だが、将来絶対美人になるだろうなつて14年後を知らなくとも断言できる。そう、何を隠そう俺は兄馬鹿だ。妹が可愛くて可愛くて仕方がない。

ただ心を鬼にせねばならない。彼女には既に、抜群の相手がいるのだ。

そう、織斑一夏。唐変木オブザ唐変木と名高いあの主人公野郎だが男としてみればハイスペだ。筈を安心して預けられる。そのためにも原作イベントをこなしつつ筈と仲を深めてほしいつてお兄ちゃんは思うワケ。

つまり……黒幕ルートしかあるまい。

亡国機業もなんのその、俺という天災スペック+原作知識という最強の組み合わせの前にはひれ伏す。

自分で言うのもアレではあるんだが、黒幕としてあまりにも最適だと思うんだよね。

もちろんマイルドな束さんだからあんまりひどいことはしない。特に人命がかかっちゃうようなこと。臨海学校は一人で素直に楽しんでほしいと思います、まる。「にしても、いつごろIS造ればいいんだつけか……」

何を隠そう、俺は今まで天災らしきことは何もできていない。

ちょっとしたスーパーウルトラハイスペック万能イケメン男子小学生として暮らしているだけで、両親とも仲は良いし積極的に箒の育児を手伝っているだけの、よくできた子供だ。

いやだつて発明とか機材がないとできないつしよ。東博士（原作の箒ノ之東博士は敬意を払つてこう呼んでいる）つて、小学生のころからバリバリ発明してたつけ？ いやーそもそも14歳の時にIS造つてりやいいんだから余裕余裕。

すべてが始まるのは俺が14歳、ISを公表し、織斑一夏とマイスウイートラブリーシスター箒ノ之箒ちゃんが出会う年だ。

「…………あれ？」

箒の寝息が聞こえるリビングでごろついていた俺は、ハツと身体を起した。

待て待て待て。14歳になつてから、の前提として、確か一夏と千冬つて……いや、おいおい！ 今まで全然気づかなかつた！ 自分の身体に夢中になつてたわ！

なんてこつた、インフィニット・ストラトス・マイルドを実現するための最適解がこんなところにあつたなんて。

「東、どうしたの？ おなかすいた？ もう少し待つてね！」

「…………俺、家出するね」

「はい？」

俺はダツシユで部屋に戻つて財布を引っ掴み、血相を変えている母さんに内心謝罪してから家を飛び出た。

そう！ よく考えたらもう織斑姉弟確保していいよね！

02：織斑計画

究極の人間とは人によつて異なる概念だろう。

頭の良さ？ 身体能力？ 外見？ 再生速度？

まあ各々の究極点は分かるが、それをまるつと全部実現しちまおうぜ、という狂つた計画がある。

インフィニット・ストラトス12巻で明かされたことだが、その結果生まれたのが織斑千冬と織斑一夏という二つの成功試作体、そして織斑マドカという計画外の試作体

だ。

読んでて「うーん、知つてた！」以外の感想は出てこなかつたよ。みんな予想してたわ。

何にせよ、そもそもこの計画がないと篠ちゃんの運命の相手が現れないで、計画自体を事前に潰しちまおうぜ！ とは思わなかつた。

適当なタイミングで接触して「ほらほら俺という究極体がいるから無駄だぜー？」でもその子たちはくれよな」みたいなことすりやいいだろと思つていたが――

――適当なタイミングでいつだよ？

今でしょ！

というわけで織斑計画の研究所前に着きました。気分としてはローカル番組にあるジャンプしたら場所が変わつて着地するあれと同じだ。ちなみに移動は貯めてた小遣い全部使って公共交通機関を使つた。

関東圏で良かつたよ本当に。……いや、これでいいのかよ織斑計画。めつちや近いやんけ。

「明日やろうは馬鹿野郎、つてな」

ちなみにここを探り当てるまで半日かかかつていない。

スマホから日本国内の建造物を片つ端からハツキングし、建物内部のサーバーに蓄積

されたデータをものの数時間で掌握し、該当する場所を発見した。天災スペックにできることはないのだ。

日は暮れてしまつたが、どうにもでなるだろ。親を心配させるつもりはない。
というわけでやつていきましょう、いざ！
たのもーつ!!

03：織斑姉妹モザイカ・シスターズ

はい、交渉成立しました。

10歳のち一ちゃんと、2歳の一夏、マドカを確保。完璧すぎるな。

俺がやつたことは実に単純で、まず俺という究極の人類を証明した。そもそもこの研究所を突き止めた時点で只者じゃないと分かつていたのか、素直に信じてくれてよかつた。もちろん色々実験された末の結論だ。あんまり遅くならなくてよかつたよ。

門番から銃を奪い取つて内部に押し入った甲斐があつたよ——あ、軍人の動きなんて完璧に先読みできるし、腕力のない身体で相手をブチのめす戦い方は親父からコピつてるし、何より俺の速さなら撃たれてからでも避けられるので武力制圧しに来た部隊は制圧し返しました。さつすが天災オレ！

まあ交渉に関しては割と綱渡りだつたので若干緊張したけど、うまくいったので良しとする。

そもそも、原作で東博士という人工物の限界を上回る自然の産物が発見されたということが織斑計画を凍結する要因となつていたわけだが、これやっぱおかしいよな？

問題は『果たして篠ノ之東を人工的に再現することは可能か否か』という点にあるのだ。

俺からの提案は、織斑計画の産物と俺と共に住まわせることで経過観察しろよベイベー、というものだつた。実際成長の度合いによつては、途中で俺が追い抜かれることもあるかも知れないし。

そんなことありえねえつて知つてんだけどな！

身柄の安全を確保して一定期間の成長を挟んだらちーちゃんと一緒にこの研究所をブツ潰しに来てやんよお!!

とりあえず生活費とかを振り込んでもらうこと、一定期間の経過観察を終えるまでは

新規ロットを製造しないこと、これを約束として取り付けた。最低系あるあるムードすぎて頭がおかしくなりそうだ。

当然俺を解剖したいみたいな意見（ニュアンス）もあつたが、笑顔で銃口を向けて黙らせた。いや無理だわ。キモい。無理。

研究所の車で家の近くまで送つてもらつてから、俺と千冬は四人で家路を歩いていた。

絶対父さん母さんめっちゃ怒つてる……怖い……

「……篠ノ之、くん」

「あ、東でいいぜちーちゃん」

ち、ちーちゃん？　と千冬が眉を寄せた。その腕に抱えているのは愛しいきょうだいだ。

俺も背中に、ぐつすりと寝ているマドカを背負っている。

「これから一つ屋根の下で暮らすんだからさ、よろしく頼むぜちーちゃん」

「……どうして、助けてくれたんだ」

む、と思う。助けるという表現が出てきた。

これやっぱ研究所での待遇あんまよくなかったよな。そもそもが究極の人類の母体として造られたわけで、ぶつちやけ人権のないマシーンつて感じだし。やっぱあの研究

所は即に潰しておこうかなあ。でも金くれるのはでかいし……うん……俺が発明でちゃんと稼げるようになつたら即座に潰す方針でいこう。

思考に浸つて いる俺を、千冬が不安 そうに見ている。

あーいかん 答えてない。もしかして新しい研究所の人か何かだと勘違いされてる?
勘弁しろよ。

「それはだな……」

「それは……?」

「…………えっと」

原作再現して妹に彼氏作るためです——言えるかボケ!

「研究所に行つたのは俺の存在を教えてあげたほうがいいと思ったからだ。普通に時間と金の無駄だし、これからどんどん生み出される生命がかわいそうだ」

口に出してから、とても傲慢な考え方だと気づいた。

頭をかく。特に千冬は機嫌を損ねてはいないが、俺にとつては最悪な言葉だった。天災かつ原作知識を持つているとさも神のような視点で見てしまうが——そんなことはない。俺は確かにできることはおよそないが、地球の裏側の人が今何を考えているのかは分からぬ。それができてこそ神様なんだろうよ。

大体これ君らを助けた理由になつてないですかね。はい。ちゃんと答えます。

「あとは、ち一ちゃんに一目ぼれしたから、とか？」

「…………は？」

オリ主ムーブすればころつといくかなと思つたら、とんでもなく冷たい声が返つてきた。

「冗談。冗談だよ」

手を振つて誤魔化す。

「結局、教えてくれないというわけか」

「少なくともち一ちゃんたちを害するためじやない……予定が狂つた節はあるけどさ」

そう付け加えてから、俺は千冬が腕に抱える、彼女の『きょうだい』を――

――彼女の妹である織斑一夏を見た。

TS一夏ちゃんやんけ。

篝ちゃんの彼氏、なし！ w

うせやろ？ 将来予定、もとい家族計画が一瞬でパアになつたんだけど。
成功試作体見せられて絶叫しそうになつたわ。XY染色体は安定しなくて一度も成
功しなかつたらしい。そこで千冬量産計画が発動し、マドカと一夏が生まれた。なので

今俺が背負っているマドカ、全然計画外じゃない。まつとうな成功量産型だ。

というわけで家に女子が三人増える。二人は幼児だ。

父さん母さんには迷惑をかけるが、もう俺は育児テクつてるし（目にもとまらぬ速さでおむつを替えられる）、金も振り込まれるし、頑張つて説得しよう！
「あ、ちーちゃんつてそうめん好き？」

「きゅ、急に何だ」

「今晩はそうめんだからさ」

そうめんを増やしてもらおうと、背中のマドカが揺れないよう気を遣いつつスマホを取り出した。

父さんと母さんから着信が鬼のように来ていた。ごめんなさい。

土下座しまくつてなんとか、三人は家族の仲間入りを果たした。

養子にしようかとも父さんは言つてくれたが、俺が将来は別の家族にしようと提案をゴリ押しした。これにはちゃんと訳があるから後で説明する。

織斑家構成。

長女、織斑千冬。

次女、織斑一夏。

三女、織斑円夏。マドカ

マドカの漢字考えるのめつちや苦労したわゝ。いや円夏つてなんやねん。おらんわそんなやつ。でもカタカナだと絶対いじめられると思つて苦心の末に決定した。

なんやかんやで、父さんも母さんも喜んでいるような気がする。最初は意味不明過ぎて俺を怒ることすらできない状態だったが、あれから半月経つて、二人はすっかり親馬鹿を発揮していた。

散歩に連れ出したり転入する学校ノリノリで決めたり（俺と同じどこに落ち着いた）、ランドセルのカタログを見てああでもないこうでもないと唸つたり。

俺の時もこんなんでしたね。ほんとこれから離散させるの申し訳ねえな。まあ黒幕だし、多少はね？

「……私たちなんかが、こんなに幸せでいいんだろうか」

自室で俺がくつろいでいると、神妙な表情でドアを開けたちーちゃんが、床に座つてからそう言つた。

「幸福だつたことなんてないと、突然のハッピーに対応できなかつたりするんだろうか。まあどうでもいい。」

その時、俺は普通にキレていた。

「うるせえ！　俺が幸せにするから黙つて幸せになつてろ！」

「……束、おまえは本当に、何なんだ？」

「天災だよ天災！　俺、天災なんだから、三人分の幸せを創り出すなんてちよちよいのちよいだつづーの！」

回答に呆れたように笑つて、ちーちゃんは——ほろりと、涙を流した。

天才なので心理が読める。読めてしまふ。これはうれし泣きだ。

「……すまない、おい、見るな」

「幸福も不幸も分かち合つていけば、それだけで人生は満ち足りるもんだよ。だから一緒に幸せになろうぜ、ちーちゃん」

大体考え直したらあの研究所クソムカつく。

人の生命勝手に作つて成功だの失敗だの、何してやがんだ。ちーちゃんが試作体ナンバー1000だから、999の生命が踏みつぶされてる。やっぱ許せねえよユグドラシ

ル！

「おねーちゃん？」

ひよっこりと、一夏が、俺の部屋に顔を見せた。後ろにはマドカもいる。二人とも最近は走りっぱなしだ。

「いーちゃんにまーちゃんか」

束博士に肖つて、こんな呼び方にしてみたがどうでしよう。

まーちゃん呼びは恒常星5殺みたいでちょっと楽しい。

「おねーちゃん、いたいの？」

「ち、違うんだ、いちか。私は……」

「よっしゃ！　じやあ二人でさ、ちーちゃんをぎゅーっとしてやれよ！」

笑顔でそう言うと、ちーちゃんがはあ!?　と声を上げた。

ハリーハリー！　と手で示せば、いーちゃんもまーちゃんもとてとてと歩いてきて、左右からちーちゃんをぎゅっと抱きしめた。

「あ、あのなあ、おまえ……」

「温かいのは幸せつことだよ。生きてるつことだから」

俺はそんな三人を、観念したちーちゃんが二人の頭をなで、そして二人の妹が気持ちよさそうに目を細めるのを眺めていた。

——はい、これハーレム狙えますね。

将来全員美人になる。一夏ちゃんが美少女だつてハーメルンのみんなが証明してくれてるし、千冬とマドカは言わずもがな。

きた。完全に時代が来てる。内心で拳を天高く突き上げた。

世界は今、俺を中心にして回つていた。転生ありがとうございます！ 美少女三人に囲まれ、さらには妹も美人！ 何だこれすげえなオイ！ 転生するとき神様とは会つてねえけど神の存在信じてもいい。神様ありがとう。

そのために養子縁組を却下したのだ。正直最後の方はマジで気迫だけで押し切つた。つまりあとは、原作を再現するだけだ。

ISを発明し発表する。白騎士事件を穩便に起こす。IS学園ができるぐらいの影響力を、ISに付与する。そして物語が始まつていく。

あー女性にしか使えないんだつけ。あれ、俺使えねえ！ 今更気づいたわ！

まあ原作だと一夏にだけ使えるようにしてたのは束博士っぽいし、その辺はちょちょいのちよいで俺にも使えるだろ。

学園に入ることには三人とも俺にべつたりの状態にしてやるぜゲヘヘ……！

やましい内心をおくびにも出さず、俺はちらりと壁を見た。

俺の部屋の、勉強机に向かつたらちようど正面に見える一枚の画用紙。

幼稚園の頃、おぼろげになりつつある記憶を必死につなぎ合わせて描いた原初のIS

『白騎士』。

まだそのころは絵画の技術を模倣してなかつたので、幼稚園児らしいきたなくも想像力豊かなイラストだ。クレヨンなので細部の線も書き込めていない。悲しいぐらいにシルエットしか分からぬが、これはこれで味があるつてもんだろ。

そう、あとはISを開発するだけだ。

04：開発開始

プロジェクト・スタート

I
S
を、
つくる。

0
■
：
■
エ
ク
発
■
■
I

0 4
： 開
発 ■
始
プロ
エクト
ーント

I S を造ればいい。 そ うなんだけど。

あとは I S を造るだけ。

I ·
S ·
つ ·
て ·
ど ·
う ·
や ·
つ ·
て ·
つ ·
く ·
る ·
ん ·
だ ·
?

序：天災の条件

織斑千冬は誰もが認める美少女である。

このたび地元の公立中学校に入学し、初日からほぼ全校生徒の話題をかつさらつた
クールビューティーだ。

入学初日で剣道部に入部し、見学の一環として行われた部員との試合で全員を叩き伏
せた、という伝説まで作つた。

しかし彼女は入部しつつも、その練習には不定期の参加となつていて。それは顧問の
教師も認めたことだ。

単純な話。

織斑千冬は、家庭のためにアルバイトをしなければならない。

現在住んでいる一軒家には、大人二名、子供が五名暮らしている。そこに至るまでの過程は複雑だが、少なくとも千冬にとつて大人二名は、両親だつた。

来年度には小学校への入学を控えた子供が三人いる。

金が足りない——自分の家族が健やかに暮らしていくためには、絶対的に金が必要だつた。

道場のみでは足りない。父親は道場経営を委託し、派遣社員となつた。母親は毎日パートタイム労働に行つてゐる。千冬もまた、新聞配りなどで生計の足しになればと日銭を稼いでいた。

両親は、千冬がわずかな賃金を持つて帰るたびに泣きそうな顔をした。それを拒めない、そんなことはしなくていいと言えない自分たちのみじめさを痛感してゐた。

剣道部顧問は、『織斑がいい家に生まれていれば』とこぼした。千冬は頭の中の一部が白熱するのを感じた。めまいがするほどの怒りだつた。震える拳をスカートのポケットに突つ込み、必死にこらえた。

自分のせいだ。

自分が転がり込まなければ。あの日、彼の申し出を断つていれば。

誰もが不幸にならずに済んだ。疫病神は自分自身だ。

制服に着替え、家路を歩きながらうつとそう考え込んでいた。一夏とマドカと篝は幼稚園に通えていない。集団行動の基本を覚えずに小学校へ入ることになる。三人とも、既に自分たちの環境が他の人と違うことを察しつつある。家中ではずっと黙つたまま、時折三人で、幼児教育雑誌をめくついている。何度も読み込んでいる。同じ本。新しいものを買うこともできない。同じ本を読み、ページが擦り切れる程に熟読している。

千冬は一度、彼女たちが熱心に見ていたページを、確認してみた。

特集は『親子で行きたい自然のスポット』——雑誌を握る手が震え、しゃくりあげ、気づけば涙を紙面にこぼしていた。行く余裕はとてもじやないがない。

鍵を取り出し、ドアを開けた。この家のローンもあつた。考えれば考えるほどに、打開策はなかつた。父親の飲酒の量が増えていることに、薄々気づいていた。家に人気はなかつた。住んでいる人間自体が、段々と薄っぺらくなっている。日が暮れたら、生氣のない父母が帰つて来る。

千冬はキツチンに上がつて、鍋を作りだめしているカレーを確認してから、リビングに出た。床で一夏とマドカと篝が寝ていて。何もすることがないから寝てしまつた。三人に擦り切れた毛布をかけた。一夏の足がはみ出でている。それをどうにもできない

自分が歯がゆくて、千冬は逃げるよう階段を上がつた。

一階にはリビングと両親の寝室。

二階に並ぶ部屋は、一夏とマドカと篠の部屋と、千冬の部屋と、そしてもう一つ。

最後の部屋は物置だった。人が住む部屋ではなかった。わずかに二畳しかないスペースに彼は住んで、学校にも行かず引きこもつていて。本来は今日、彼も千冬と共に中学校へ行く予定だった。彼が部屋から出てこないことを両親も千冬も予期していて、それを受け入れた。

知らず知らずのうちに、千冬はそつと足音を殺して、その部屋に近づいていた。

中にいるのは人生の恩人にして、篠ノ之家がこうなつてしまつた、ある種の元凶。だが、家族の中で最も収入を得ているのも彼だつた——それは開発した機材の権利から得られる、まとまつた収入。それでも足りなかつた。

「クソツ、クソツ、なんでだよ」

薄いドア越しに聞こえる呻くような声——千冬は自分の口を手で覆つた。視界がにじむ。呼吸が荒くなり、廊下に座り込んだ。

「こんな、こんなはずじゃない……！」なんで、なんで造れないんだ、畜生、クソツ」
彼がかつて暮らしていた部屋は、今は千冬の部屋だつた。壁に置き去りにされた画用紙を、千冬はまだ剥がせずにいる。

「俺は天才、天才のはずだ。なんで分からぬ、なんで造れないんだよ、なんでつ
追いかけ続けている夢はあまりにも遠い。それこそ、無限に手を伸ばしても届かない
成層圏の彼方にあるような夢。

「篠ノ之東なら造れるはずなのに、なんで、なんでなんだよ……！」

千冬は天井を見上げた——かつて手にした気がしていた幸福は、いつの間にか消え
去っていた。

単純な話。

彼は天才だったが、天災ではなかつた。

既存の知識を吸収して応用することを可能にする頭脳。
それは生まれ持つたスペックである。

では、まったく未知の技術を一から開発する発想力は？

ここに——天才と天災の差が存在した。

篠ノ之東のスペックを彼は持っている。

篠ノ之東の思考回路を彼は持っていない。

故に、彼女に造れたものが彼には造れないことが発生し得る。

篠ノ之東は——天災の条件をクリアできなかつた。

破：天災の絶望

篠ノ之東には I S が造れない。

壁を殴つた。何度も殴つて、涙を流した。

床に座り込んで、顔を手で覆つて呻く。こんなはずがない。こんなはずじやなかつた。なんでこんなことになつているのか。

涙に視界がにじみ、それがどうしようもないぐらい、自分が人間の限界を超えた天災ではないことを証明しているようで、声にならない声が唇から漏れた。

彼は部屋からほとんど出ない。

食事は月に一度買い込む栄養食品のみで済ませている。かつて家族がドアの前に食事を置いていたが、やがてそれも消えた。見捨てたのではなく余裕がなくなつた。

家庭の事情を全て、東は把握していた——それが自分のせいだということまで述べて。

愕然とした。自分のしたことは、誰も幸せにできていない。

研究所からの振り込みはいつの間にか消えていた。研究所自体がなくなっていた。暗部同士の抗争に巻き込まれたのだと、ハッキングして知った。後ろ盾はなくなつた。織斑計画を知る人間はこの世に残っていない。当事者と、自分だけだった。

開発をした。発明をした。役に立つ機材を造つては企業に売りつけた。どれも評判を得ているが、束の手元に返つてくるのはわずかな契約金のみ。それだけでは、七人の大家族を養うことはできない。

企業に打診した——もつと大きな発明ができる。そのために開発費を、研究費を貸してほしい、必ず返すと。一蹴された。鼻で笑われた。彼らは皆、束を嘲つていた。後見人はいない。企業にとつて束は、珍しくまともな品をよこす変人だつた。どこの組織にも所属していない束をまともに取り合う企業はいなかつた。

研究所にも駆け込んだ——頭脳を評価はしてくれたが、高校を出てから企業を受けなさいと言われた。束は赤裸々に家庭の事情を語つたが、研究所の責任者は苦い顔を浮かべた。

『君ぐらいの年齢の子に話すことじやないのは、分かつていてるんだ。でも、すまない。我々は——我々の生活で手が一杯だ。恐らくここに勤めたところで、君の問題は解決できない』

目の前が真っ暗になつた。事実、それを聞いて束は、その場に崩れ落ちていた。

研究員の生活——調べるほどに吐き気がした。賃金は雀の涙。研究成果は、企業なり政府なり、とにかくどこかの誰かのものになる。例え莫大な利益を生み出すような発明品が存在したとしても、それは結局研究者の懷には来ない。

それこそ、世界を変えるような発明でもなければ。

必要だつた——空を裂き縦横無尽に駆け回る存在。I.S. インフィニット・ストラトラス。夢物語だつた。どんなに理論を積み重ねても完成の一端すら見えない。

束は既存の理論ほぼすべてを吸収していた。自在に組み合わせ、応用することができた。

それでも造れない。未知の技術を創造するという能力が、悲しいほど致命的に、彼にはなかつた。

生活苦は解決できない。自室の中で、モニターを睨み続ける日々。理論の進展はない。収入だけは確保できているが、それだけでは現状ですら足りていらない。一夏、マド力、箒が小学校に入学するのは来年。

それは、本来 I.S. が公表されている年だ。

間に合わない。どうしても間に合わない。既に本来の通りに時が動くことを、束は半ばあきらめていた。

いまや篠ノ之家では、働く年齢になつたら誰もが働いている。千冬がアルバイトをしていることを知つた時に、束は絶句した。

父の勤務はうまくいっていない——派遣社員故に、侮られている。道場の経営は委託こそしたが、委託先が虎視眈々と土地の売却を狙つていることを束は知っていた。知つても、どうにもできなかつた。

彼には世界をひつかきまわせるような力が、何もなかつた。

「ふざ、けんな」

二畳ほどのわずかな物置。四方の壁には数式と図がびつしり書き込まれていた。
それでも、彼が求めるものは完成していない。

彼の眼前に立ちふさがつている問題は3つ。

- ① I Sコアの製造
- ② I Sアーマー や武装の量子化技術
- ③ P I Cの開発

どれもこれも、既存の科学技術では到底太刀打ちできない難題のみだつた。

本来の篠ノ之束は、息をするようにこれらを超えていつたはずだ——そう考えるだけで、無力感に死にたくなる。

「とにかく、企業にアピールするとすれば間違いなくコアだ」

一人きりの部屋、自分で思考を整理するため、絶えず彼は考えを口に出す。

狭いスペースを往つたり来たりしつつ、インターネットに公開されている論文を次々に読み込んでいく。

「エネルギーの出どころ……原材料は時結晶^{タイム・クリスタル}、東欧のルクーゼンブルク公国地下だ……もう発掘されているなら大使館を通じて……だめだ、コネがまつたくない……」

膨大なエネルギーを蓄えることのできるコアは、現在世界に存在するあらゆる物質を見ても不可解な存在だ。

それを可能にするのがルクーゼンブルク産出の時結晶^{タイム・クリスタル}なる物質だと束は知つていた——知つていたが、果たしてどうすればそれが手に入るのかはまるで日途が立っていない。

「いや待て。コアの問題が時結晶で解決できると見込んだうえでならば、まずはP I Cから取り掛かるべきか?」

P I C——慣性制御のようなものだと理解していた。I Sを浮遊・加減速させる、基本中の基本システムだ。これがなければI Sは兵器としての有用性を発揮しない。

だがこの世界に一体全体どのようにして、物体に自在に推力を与えるギミックがあるのだろうか。

そもそも慣性力などというものは存在しない。物体の移動のつり合いが取れている

という現実を前提に、そこに力が働いているはずだという状態を説明するための言葉だ。いや、力としては観測できる以上存在しないという言い方は不適切だろう。反作用が発生しないという面を見なければ確かに力として……

言葉に惑わされるな、と束は頭を振った。ここで肝要なのは、物体に対して自由に推力を与えることが可能かどうか。

でなければ宙に浮遊する機械を生み出すことはできない。

天才の頭脳が回転する。考えろ。考えなければ、この地獄を終わりにできない。

推力を得る方法——液体燃料の流動によるもの。小型コアではできない。気体の場合も同じだ。

膨大なエネルギーを蓄えることができたとしても、それが質量を伴つてしまえば大型化を強いられる。いつそ大型のコアを試作してから考えるべきか——甘い誘惑にかられる。

回転が、空回りし始める。今まで積み重ねてきたもの一切が無駄であることに、低く唸る。悔しさに涙がにじみ出る。最近は、一日中ずつと泣いてばかりだ。

壁に書いた図面を見た。だめだ。既存の技術の組み合せでは限界を超えない。何度目かもわからない現実に打ちのめされる。声が出ない。自分が自分でなくなるような感覚。天災であることを自負して、そう生きるために生きてきた——天災なんか

じやなかつた。自分は劣等な、まがい物だつた。できるはずのことができなかつた。万能感は失われた。

「クソ……」

篠ノ之東ならこんな場所で躓かない。そのはずだ。笑いながらこんなハードルを跳び越えてしまうはずだ。自分にはできない。できるはずがない。拳を強く握り、爪が皮膚を破る。溢ってきた血が、床にしづくとなつて落ちた。血が赤いただの人間が、自分がつた。それではいけなかつた。

突拍子もない、天才特有の現実味のない案もあつた。現実味のない案は、現実にできないのだと知るだけだつた。恐らく天災はそれを現実にできる。そこでもまた、自分にはできぬことが増えた。

できない。何もできない。できることばかりで嫌になる。想像していた名誉も運命も、跡形もなく碎け散つた。手の上に何も残らなかつた。

時間を確認した。既に日が暮れている。部屋に窓はなく、時計もモニターの隅に表示されているのみ。時間感覚が失われてどれほどだろうか。

睡眠をここまで必要としない身体はありがたかつた——夜遅くになつてシャワーを浴びる時、いつも鏡を見て、伸びっぱなしの髪とどす黒い限を見て笑つた。嘲笑つた。この有様だというのに、成果はまるでない。

何も得られない日常がひたすら繰り返される。ただ心が摩耗していくだけの日々。千冬は新聞配達に加えて、同級生の妹の家庭教師を始めていた。剣道部には週に一度顔を出していたのが、それすらできなくなつた。束にはどうすることもできなかつた。無力で、みじめだつた。

金策の必要性に駆られていた。

背中を常に追いかけてくるような圧迫感があつた——そんなことをしている暇があるなら、ISを造るべきだ。うるさい。分かつていると束は吐き捨てた。髪をはさみで雑に切り捨てて、身だしなみを整えた。外行きの時だけはこうしていた。

家を出る束を、三人の幼子が不安そうに見ていた。大丈夫、行つてくるとだけ言つて、束は外に出た。

往来を歩く人々の中に、埋没するようにして歩を進める。男子としては低い身長、私服姿、学校をサボつてているのは明白だつた。その不健康そうな顔色に、少しだけ通行人

が道を譲っていく。譲るのではなく、避けられているんだな、と束は自嘲した。

誰もかれもが敵だつた——無条件に信じられる存在などなかつた。家族だけはそうだつたが、怖くて顔を合わせることもできなかつた。今までの苦難も、絶望も、全て束が引き込んだものだ。すべての元凶であるという自覚が、かたくなに物置部屋のドアを閉ざさせていた。

(……とにかく、今あるものを売つちまうしかない)

リュックサックの中には、ハイパーセンサーの雛形とも言うべき、高精度センサーが入つていた。

恐らくこれなら大丈夫。自分に言い聞かせる。束は何でもできるが、自分を鼓舞することは苦手だつた。無根拠な自信が打ち砕かれた後の彼は、自分を信じることができなかつた。

「こんにちは。ご用件は？」

目的地のビルに入り、受付まで進む。受付嬢は戸惑いながらも、束に声をかけた。

「あの、ものを、見てほしくて」

困つたような表情を浮かべられ、心臓のテンポが速まる。

「発明品なんです。役に立つとおもいます」

「君が、造つたの？」

「はい——篠ノ之束、と伝えてください」

眉を寄せながら、彼女はどうやら束をいかに穩便に追い払おうか考えているようだつた。

冗談じやない。心臓が早鐘を打つ。門前払いを受ける前に、せめて発明品を。祈るようにして、リュックに手を伸ばした時だつた。

不意に束の肩に手が置かれ、びくりと身体が跳ねた。倦怠感と絶望感が、感覚を全て鈍くしていた。後ろに立つ人間に気づいていなかつた。

「あ、アルベル社長!」

受付嬢の叫びに、今度こそ束は言葉を失つた——恐る恐る振り返る。

「噂を聞いたことがあるよ、発明家の少年君……話は奥で聞かせてもらおうかな」

長身? 躯、撫でつけた金髪と自信に満ちた眼。

束が訪れたデュノア社の頂点に君臨する男、アルベル・デュノアがそこにいた。

応接間の調度品は豪奢で、ソファーに座るだけでも気後れした。

束はおずおずとリュックサックのジッパーを下げる、中に入っていたセンサーを机の上に出した。

「これは？」

「高精度センサー……です。死角なしに、遠方を観測することができます。想定は、宇宙で、宇宙線などを観測するためのものです」

アルベールの目の色が変わった——束は素早く彼の心理を読んだ。驚嘆。疑念。困惑。恐らく発明品と、その作り手のギャップに戸惑っている。

「その……どうでしようか」

「試してみても？」

アルベールは束の承諾を待てないというように、机の上に置かれた電話機に視線を走らせた。束はこくりと頷く。壯年の男は飛びつくようにして受話器を取つた。
「アルベールだ。視察を延期にして、第三実験室を開けろ——宇宙開発部の人員全てを回せ」

大事になつてきた。睡をのんだ。これは願つてもないことだ。発明品の出来は保証できる。問題は、ここから如何に金を引き出すかだ。

命令を簡素に伝えてから、アルベールは受話器を置いた。それから、束の瞳を見た。

「よくない目だ」

「え？」

「噂から予想した人物像と合致したよ。君は……かわいそうだな」

カツと、頭に血が上るのを自覚した。ふざけるな。何故自分が、憐れみを受けなければならぬ。本来は違うんだ。違うはずだつたのだ。こんな風に、企業の人間の顔色をうかがうようなこと、している予定じやなかつた。それなのに。

「金策に走り回る子供というのは、もつと明るい目をしているはずだ。娘は私に甘える時にやや打算しがちだが、それでも純粹な目だ。君は——うん、そうだな。よくない場所で育つっている」

「やめてください……」

激情に駆られた。はずなのに、出てきた言葉は弱弱しかつた。

何故だ、と自分に問う。怒り狂うべきだ。家族を蔑むなど、取引を捨てて走り去つてもいいような侮蔑の言葉だ。それなのに反抗する気力はなかつた。もはや、束の中に、何かに対して戦う気概が残つていなかつた。

「野心があるのは分かるよ。遠大な理想があるのも分かる。それぐらいは読めるさ。だが君は、何故か自分で設定したそれらを諦めそうになつていて。なら結論は一つだろう。他人から押し付けられた希望なんて、捨ててしまつた方がいい」

心理を読まれた——アルベールの瞳は純然たる憐憫の情を映している。きっと親や家庭環境に理想を押し付けられている、と読まれた。それはあながち間違いではなかつた。束にとつての最終目標は、彼が生まれた時から決まつていたのだから。捨てる——ISを造るのを諦める。そして学校に通つて、普通の学生になる。アルバイトをして生計の足しにする。それから学歴を重ねて、企業お抱えの研究者となる。少なくとも、かつて打診した研究所よりは、企業とのつながりがある方がずっと生活を樂にする。

そうした社会にとつて当然の成功を、束は知らないうちに拒絶していた。

ISを造りさえすれば。

ISを造れば千冬は世界最強になる。莫大な富を得ることができる。

ISを造れば一家は離散するが、国家によつて保護される。

ISは——造れなかつた。

千冬はただの学生としてアルバイトに精を出していた。

篠ノ之家は国家にとつて保護する価値もないただの一家庭に過ぎなかつた。描いていた未来図は握りつぶされた。他ならぬ束の無力さが、台無しにした。

どうしろつていうんだ——内心で吐き捨てた。

安定した道を行くべきだ。いやそれは誰なんだ。篠ノ之束として生まれた自分がそんなことをしていいのか。そもそも時間がかかる。この地獄は続く。千冬や自分が大学に通うことはできない。高卒の労働者として働いて、それで一体どうなる。貧困が貧困の連鎖を生み、泥沼から逃れられなくなる。

自分は家族を幸せにしたいと願つているのに。

(……ISさえつくることができれば)

結局、懊惱の行きつく先はいつも同じだつた。

「実験室へ向かう、着いてきてくれないか？」

「…………はい」

ほどを噛みながら、束はソファーから立ち上がった。

アルベルは手に持ったセンサーをしばらく眺めてから、唇を僅かに吊り上げた。

結論から言えばセンサーは無事起動し、大いに実験室を沸かせた。

アルベールは驚嘆に声を上げ、他の研究員らも言葉を失うか、あるいは思いつく限りの称賛の台詞を口にした。

想定しているハイパー・センサーにはほど遠いが、現行の代物を大きく上回るスペックのものは既存理論の組み合わせで生み出すことができた。ISの技術は一部が成功している。あくまで一部で、その中核となる理論が一向に進まない。

「君は素晴らしい発明家だ」

「……どうも」

研究員たちが束を肩を叩く。自分が優れていると声高に主張したかったが、束は彼が勝っている点が発明に関する一点のみであることに打ちのめされている。誰もが素直に束の発明を称賛していた——他人を信じることのできない自分が嫌になった。

「これをベースに新規・センサーを製造できるか？」

アルベールの問いに、研究員が押し黙つた。

「……我々が手を加えるよりも、いつそこのまま量産化したほうが良いかと思います」

「正直な感想だな。私もそう思う」

恐る恐る一人の研究員が口に出した意見に、アルベールは鷹揚に頷く。

それからびたりと、自分の胸までほどしか身長のない束に視線を向けた。

「君にとつて必要なものを出そう」

「——ツ!!」

必要なもの。開発費。時結晶。何もかもが足りていない。

救いの糸が垂らされたような感覚に、束は安堵の息を吐いた。

ルクーゼンブルク公国との連絡は速やかに行われた。

アルベルが語るには、実際問題、時結晶は近年になつて発掘され始めていたが、そのあまりに不可思議な性質から研究が進んでいなかつたらしい。

実物を一つ送るという連絡が来た時に、束は拳を突き上げた。想像だにしなかつたハイテンションな様子に、アルベルは面食らつた。

「しかし何故、時結晶?^{タイム・クリスタル}？」だつたか、そんなものの存在を知つていたんだ

「すみません……僕、天才なんです」

調子を取り戻しつつあつた——猫を被つていた、あるいは素の自分を忘れてしまうほ

どにすり減っていたか。アルベールは直感的に後者だと気づき、深くは追及しなかつた。

「無論、その時結晶を用いた発明も報告してくれ
「いいですよ」

デュノア社は鉄鋼産業から先端科学までを取り扱う、一大コーポレーションである。今日、その日本支社にアルベールが視察のため来日したのは、東にとつては世界が自分を中心回っていると錯覚してしまうほどの僥倖だった。

「そしてもう一つのお願いなのだが……」

「事務職でも、何でもいいんです」

束の提案——父親をデュノア社で雇つてもらうこと。

派遣社員としての労働に彼が追い詰められつたるのは、一家が皆知っていた。いつしか父は、子供に笑顔を見せなくなつていた。自分のせいだ。ならば、その笑顔を自分が取り戻してみせる。

「どう思う？」

「アルベール社長の命令といえど、技能試験や面接などは受けていただきたいです」

日本支社の人事部長は毅然として言い放つた。そうしたほうがアルベールには受けがいいだろうという打算は、束に透けて見えていた。ふざけるな——お前の点数稼ぎの

ために、俺の家庭をめちゃくちゃにする気か。理不尽な怒りが胸に渦巻く。
アルベルは顎に指をあて考え込んだ。

「工場労働であれば、よほどのことがない限りパスできるだろうな」

「それはそうですが……」

「無論大目に見ると命令しているわけではない。君たちはきちんと試験を評価したまえ」

束は落胆しそうになつたが、持ちこたえた。

工場労働、単純労働とはいえ天下のデュノア社だ。今よりは断然マシである。
面接も試験も、最悪束が面倒を見る。頭脳のスペックだけは本物だ、苦も無くこなせるだろう。

「彼を送つてくれ——ああ、アドレスには私から連絡がいくことがあるだろうから、定期的にチエツクするように」

アルベルが自分のスマートフォンを取り出し、束に向けて軽く振つた。不意に束は、ポケットから自分の端末を取り出した。データが一件送られている。不自然でないよう動きに気を遣つて、そつとデータを開いた——採用試験の問題だった。

いいのかよ、と呆れる。それ以上にうれしかつた。アルベルが片目をつむつた。

「今日はお世話になりました」

頭を下げるから、束も片目をつむつた。自分の身体の動きを掌握している天才にとつて、ウインクなど容易かつた。

帰路につくころには日が暮れていた——恐らく両親は既に帰宅しているだろう。
足取りは軽い。いい報告しかないのだ、当然だつた。

デュノア社との契約金——期待していたより多かつた。生活はぐつと楽になるはずだ。それが定期的に振り込まれる。束は自分を追い詰めていた敵が、一瞬で霧散するのを感じた。

幸運に助けられた。あまりにも出来のいい偶然だつた。

(こんなにラッキーなことがあると、しつペ返しがありそうで怖いなあ)
半ばスキップするような心地で、見えてきた家に進む。
鼻息荒く、一步一歩進む。

——最後にこうして歩いたのはいつだつたろうか。

これから の 未 来 に 希 望 を 夢 見 て こ こ を 歩 い た の は。

「…………ちーちゃん」

隣に彼女がいた。互いに小さな命を背負つて、ここを歩いた。

思ひ返せば顔も合わせなくなつてどれくらい経つただろうか。ないがしろにするつもりはなかつた。ただ、怯えるようにして距離を置いていた。疫病神だと思われている。その目を見ただけで感情を悟つてしまふ頭脳が、視線を合わせることを拒絶していた。

でも、もう、違う。

「大丈夫だ」

自分を鼓舞した。苦手なことだつたけれど、今から、久しぶりに家族と顔を合わせる。

そして自分が救世主になる。天災だのなんだのは、今はどうでもいい。

ただ自分の家族を幸せにすることさえできればいい。それが、今ならできる。

「俺は、大丈夫だ」

だつて天才だし——続く言葉を舌の上に転がした。

歩みを止める。眼前に家がある。生まれ育つた自分の家だつた。この家のローンだつて、自分に振り込まれる金額と、父親の賃金を合わせれば大丈夫だ。一夏たちだつて学校に通わせてやれる。

アルベルの言葉を思い出した。そんな理想は捨ててしまえ。一理あると思つた。I Sの開発だけを見据えていてはいけないんだ。

時結晶は入手できるが、まずはデュノア社に発明品を安定供給することを考えよう。それでいいはずだ。もうどのみち間に合うはずがない。I Sを造つて全部ひつくり返すなんて絵空事だ。できもしないことをいつまで引きずつているつもりなんだ。

「……俺は、大丈夫だ」

ドアの前に立つた。ドアノブを握るだけで、おなかが痛くなつた。構わずに回して、ドアを開ける。

玄関から続く廊下の奥で、リビングに明かりがついている。扉を閉め、鍵をかけ、靴を脱いだ。思つていたよりも動作が遅くて、もどかしいぐらいだつた。

リビングから話し声は聞こえない。自分が帰つてきたせいだろうか。束は普段、リビングに顔を出すことなく階段を上がつて部屋に戻つていた。合わせる顔がなかつたから。

(でも今は、違う)

意を決して、一步踏み出した。リビングに入る。食卓を囲む家族たちが、みんな束を見ていた。

予期せぬ闖入者に目を見開き、箸を宙に突き付けたまま固まっている。

(ああそうか、この食卓に、俺はもう存在していなかつたんだな)

でも、まだ大丈夫。まだ間に合うから。

自分に言い聞かせて、拳を強く握つた。

「ただい、ま」

声を絞り出した。最初に反応したのは——千冬だつた。

「ああ、ああ……！ 束、お帰り……！」

彼女の声は震えていた。視線は怖くて合わせられないけど、その声色が自分を気遣つてているのが、束はどうしようもないほどにうれしかつた。

食卓を囲む一夏たちは、じつと束を見ている。その瞳には悪意も敵意もなかつた。

両親の顔は、まだ見れない。リュックを床に下ろして、中から封筒を引っ張り出した。視線を床に落としたまま、封筒を差し出した。

「父さん、これ……」

父は無言のまま封筒を受け取つた。

デュノア社の刻印、中から出てきたのは中途採用に関する書類。

「受かる——テストとか、ほとんど形式的なものだ。今日、取り付けてきた」

視界の隅で千冬の肩が跳ねた。驚いているんだろう。束自身も驚いていた。

改めて言葉に出して、自分の成果に実感が伴う。なんとかなつた——やつと、ようや

く、スタートラインに立てた心地がした。

「給料もいいし、楽になるよ。俺も、別個に契約取り付けられたから。今までみたいな感じじゃなくなると思う……」

言葉を切つて、空気を窺つた。

静かだつた。嫌になるほど静かだ。誰も声を上げない。束は自分の心臓が跳ねるのを感じた。何か、何かしくじつたのか。いいやそんなはずがない。束自身も結果を出した。父の職も獲得した。非の打ちどころはないはずだ。

「た、束ツ」

千冬が椅子を蹴り倒すほどの勢いで立ち上がつた。反射的に顔を上げて、彼女の目を見る。読み取れる感情は恐怖、怯膽――

(――なん、で)

何故千冬がそんな反応をするのか。

答えはすぐに来た。

破：天災の絶望

「誰が、そんなことを、頼んだんだ」

「…………え？」

声が、こぼれ出た。

父の声は震えている。束は彼の表情を、その時になつてやつと見た。
真っ赤になつていて。身体が震えている。束でなくともわかる。憤怒。
さらに深層まで、瞬時に読み取れる。読み取つてしまふ。

何故俺がこんな目に。

何もかも順調だつたはずなのに。

職にあぶれて、お情けを受けようとしている。
ふざけるな。

誰のせいだと思っている。

もとはと言えば。

全部全部お前のせいだ。

お前が全部台無しにした。

お前なんて――

(あ)

感情の奔流を、東は呆然と眺めていた。それしかできなかつた。

――お前なんて、いなければよかつたのに。

「う、あ」

後ずさりして、しりもちをついた。見上げる父は部屋の照明が逆光になつて、顔に影

が落ちている。

束ほどの頭脳がなくても、分かり切つたことだつた。全部そうだつた。純然たる事実。全部、何もかも束のせいだつた。

成果でチャラにできると思つていた——甘かつた。父は辛酸をなめさせられ、もう、間に合わない状態だつた。

デュノア社への取り次ぎが、火に油を注いだ。

父親の瞳の感情が一色に染まり、それは痛いほどの赤色で、矛先は自分に向けられていて。

「あ」

遅かつた。間に合わなかつた。

篠ノ之東は、誰かを救うことが、もうできなくなつていた。

書類を破り捨て、椅子を蹴倒して父が立ち上がつた。

誰が悪いんだろうかと考えた。他でもない、篠ノ之東自身だと即座にはじき出せる。ならこれは、仕方のない罰なのだろう。

然るべき罰であつて、理不尽な暴力じやない。だから大丈夫。これは仕方のないことだ。自分はこういうことをされても仕方のない存在なのだ。

動こうとした千冬を視線でけん制しながら、束はそんなことを考えていた。

血のつながった実の父親が、自分に向かつて拳を振り上げるのを見ながら、東は、そんなことを考えていた。

二畳しかない物置部屋に座り込んで、東は荒く息を吐いた。

頬が痛む。何度も殴られ、床に叩きつけられた。止めに入ろうとする千冬を、母が怯えた様子で引き留めた。何事にも優先順位がある。引きこもりがいくら殴られても問題はないが、学校に通う千冬の顔がはれ上がついたら、それは問題になる。そこまで無意識のうちに計算していることを東は察していた。

一夏がじっと、目を見開いてこちらを見ていた。マドカは泣き出していて、箒と一緒に一夏の背中に隠れていた。三人には見てほしくなかつた——忘れてくれと何度も願いながら、殴り倒された。

痛みは感じない。身体のスペックが感じさせてくれない。朝を待たずして、腫れは引いてしまうだろう。自分のとつての罪の象徴として残りもしない。避けようと思えば

避けられた。反撃して逆に父を打ちのめすことだつてできたはずだつた。しなかつた。

当然の報いだと思つた。束がこの家庭をぶち壊した。父には、束を殴る正当な権利があると思つた。

「ちく、しょう」

右手で顔を覆つた。涙があふれ出る。どうしてこんなことになつてゐるのか。自分がまいた種だということが嫌というほど分かるから、現状を受け入れきれない。

間に合わなかつた。どうにもならなかつた。もうこんな、普通のやり方で救えるような段階は、過ぎ去つてゐるなんて。

「畜生、やつてやる、やつてやればいいんだろ、畜生」

折れそうになる心を無理矢理補強する。必然、現状への行き詰まりが発想を飛躍させる。

一発逆転のチャンスはまだある。

まつとうなやり方ではもうだめなら、世界そのものを書き換えてしまえばいい。

束は涙を拭つて天井を見上げた。天井の向こう側にあるはずの空、その向こう側にあるはずの成層圏を睨みつけた。

「やつてやる……助けるんだ。俺がみんなを助ける。天災なんだから、みんなの幸福ぐ

らいちよちよいのちよいで……

フランシュバツク。

『俺、天災なんだから、三人分の幸せを創り出すなんてちよちよいのちよいだつづーの
！』

束は呻いた。

できていなかつた、過去の誓いが瞬時によみがえつた。

誰も幸せにできない。天災なんておこがましい。自分は、今の自分は、ただの愚か者
に過ぎなかつた。

「…………おれは」

自分の手を見た。ちょっとした発明家に過ぎない。舞い上がつていた。過信してい
た。万能感は失われ、家族の助けになることもできなかつた。

足音が聞こえた。大人のものでも、幼児のものでもない——

「…………束、入つても、いいか」

千冬の声。びくりと身体が跳ねる。ドアにカギはついていない。誰もが入れる部屋
だが、誰も入つてこなかつた。

「ま、待つて、その」

「入るぞ」

ドアが開かれた——肩にかかるぐらいの黒髪を下げた織斑千冬が、迷いのない動きで部屋の中に入ってきた。後ろ手にドアを閉められる。

彼女はそのまま、束の隣に膝を抱えるようにして座つた。

「……ちーちゃん、どうしたんだよ」

「いや、痛みは、引いたかと思つて」

束は対応を逡巡した。何を言えばいいのか、どう返せばいいのか、何も分からぬ。

戸惑つているうちに、千冬の腕が伸びた。殴られた束の頬に手を当てて、至近距離から覗き込んでくる。

「……父さんも、きっと、明日には冷静になつてくれる、大丈夫だ」

慰めの、言葉だつた——同年代の女子に、なんとか気を遣つた言葉を懸けられていた。恥じ入つた。

頬に添えられた手は温かい。

「俺も、大丈夫だよ。まだあきらめてない。まだなんとか、できるはずなんだ」

「……インフィニット・ストラトスか?」

「ああ」

あれさえあれば。

こんな地獄を終わらせることができる。

「……東」

「やめろって、言うんだろ。分かつてる。分かつてるんだよつ。でもあれは造らなきや
いけない……あれを造れないと、俺は俺なんかじやなくなつちやう……必要なんだ、あ
れは、絶対に」

千冬は東の声が震えていることを察した。強迫観念にとりつかれている。

休むべきだ。夢を追つて走り続けるだけでは生きていけない。なんとか言いくるめ
て休ませるべきだと、千冬の冷静な理性が告げている。
けれど。

「私は」

息を吸つて、千冬は東の肩に自分の頭を乗せた。

「私は、お前を応援するよ」

「…………ッ！」

思つてもいなかつた言葉——驚愕に目を見開く。

千冬は泣きそうな声で続けた。

「私たちを助けてくれた、東の、助けになりたいんだ。私はどんな時も東の味方でありた
いと思う。だから……」

「……だから？」

「幸福も不幸も、分かち合つていこう」

ハツとして、言葉を失つた。その台詞は、かつて、自分が彼女に言つたものだつた。「大丈夫だ東。きっと、うまくいくさ。まだ、我慢がしばらく必要かもしれないけど。でもきっと、うまくいく。だから……大丈夫なんだ」

「…………うん」

千冬の耳のすぐそばで、嗚咽の声が漏れた。鼻水をすすつて、東は必死に涙をこぼさないようこらえている。千冬はいつか、妹たちにしたように、東の頭に手を伸ばした。根拠なんてなかつた。けれど、東の味方でありたいというのは、心の底からの本心だつた。

これからどんな地獄が続こうとも、きっと彼さえいれば自分は大丈夫だと。織斑千冬はただ、篠ノ之東の涙拭いながら、そう思つた。

月日は流れる。

織斑一夏はランドセルを背負つて、小学校へ行く道を歩いている。両隣には箒とマド力がいた。

それを束は、窓から眺めていた。三人は学校の教室でずっと一緒にいる。仲が良いというものもあるが、単純に友達がないのだ。誰かと一緒に何かをするという経験のなさは、多大な精神的負担になつてゐる。二年生の今はだいぶ落ち着いたが、教室の中で突然箒が泣き出すこともしばしばあつた。

教師からの評判も、クラスメイトからの受けも悪いだろう。カーテンをさつと閉めて、静かに目を閉じる。千冬の部屋にいた。千冬は新聞配達のため、早朝から出かけている。

壁を見た。かつて描いた落書きの画用紙。まだ貼つていたのかと笑う。悲しい笑いだつた。

箒ノ之束の手元に時結晶が届けられ一年。

デュノア社にはISの技術を部分的に流している。金銭的な補助は、余裕こそないが、子供たちを学校に活かせてやれる程度には機能していた。

そして問題の時結晶——ISコアの原材料。

束はここでもまた、天災の壁を越えられずにいる。

不可解な性質は実験のたびに結果を変動させる。安定した何らかの反応などなく、既存の科学法則をすべてあざ笑うかのような物質。

「……やつてやる」

父親はあの日以来、子供と会話をしなくなつた。

母親はいつも、父に怯えている。

『東お兄ちゃん、がんばつて！』

先日、不意に顔を合わせてしまつた一夏が、そう言つた。
まつすぐな目で東を見て、そう言つた。

なんとなく、救われた気がした。

「大丈夫だ。やつてやる。俺はやつてやるよ」

視線の先にある、クレヨンで描かれた『白騎士』。
未だ地獄は終わらず。

彼の理想は空の彼方に存在する。

急：天才の末路

「何、あれ……」

中学校に入つてから知り合つた友人が、ステージ上のショーやを見て呆然とした声を上げる。

彼女は、それがなんだかおかしかつた。同時に誇らしかつた。

「凄まじい混雜のしかただな……おい姉さん、はぐれないよう私と手をつなげ」

「なつ、マドカお前なんだそれは！　はぐれるとしたらお前の方だろう！」

「余計なことを言うな筈！」

妹と幼馴染が、ぎやあぎやあと言い合つている。いつもの光景だつた。

「あんたの家族、いつも賑やかよね……」

「いいことだろ？　オレは二人のああいうとこ、好きだぜ」

人ごみの喧騒の中でも、二人の乙女イヤーはその言葉を鋭敏に察知したらしい。取つ組み合いの手を止めて、二人して耳を赤くし静止してしまつた。

次世代科学技術を一般人も専門家も関係なしに公開するエキスピの、最も大きなス

テージ。

フランスに本社を置く総合機械メーカーであるデュノア社が日本で発表したそれは、会場中の人々の視線を釘付けにした。

『——以上の点から、こちらの試作品の段階でも、既存の宇宙服と比較した場合安全性が12000%向上、機動性も6800%向上し……』

ステージ奥のモニターに表示される数字は、現実そのものを塗り替えてしまうような馬鹿げた数字で。

何よりそのモニター、もとい空間に投影されているディスプレイを、発明した本人は何でもない付随物のように一言の紹介で済ませてしまった。

誰もが目を離せない。意識を逸らせない。

世界の最先端を駆け抜ける男の言葉は、皆のリアクションなどどうでもいいかのように、淡々と続けられている。

「あんたのお兄ちゃん……マジですかい人なのね」

自分たち四人——家族三人と級友一名は、彼からもらつた招待券でこの場にいた。

本来は級友ではなく長女が来る予定だったが、仕事の都合で来れなくなり、代わりにクラスで仲の良い中国からやつて来た活発な少女を誘うことになつた。

「うん、そうだね」

凰鈴音の言葉に、織斑一夏は即答した。
 視線の先にはステージ上で発明品——Extended Operation Seeker、通称『EOS』を開発総合責任者として説明する一人の男がいた。

けれど、誇りには思うけれども。

織斑一夏は、舞台に立つ篠ノ之束の瞳が——まるで絶望しきったように濁っていることに、気づいていた。

エキスポを終えた休日の後の月曜日。

一夏は通学鞄を片手に、倦怠感を引きずりながら歩いていた。

日々のアルバイトは彼女の体力を削る。それは直接疲れさせる以上に、その連鎖が彼女の体力上限を削つていてるような感覚だった。

中学校では姉から習っていた剣道を少しやつてみたかったが、諸々の事情から踏み出せずにいた。道場を見学し、試合も見た。恐らく自分が一番強いだろうと思った。い

や、それはどうだろうか。

「一夏、今日は千冬姉さんの帰りが遅い。早めに帰つて洗濯物を取り込んでしまおう」左を歩いていた妹、マドカも剣の腕は自分に負けてはいない。彼女はどちらかといえば剣道ではなく実戦剣術に重きを置いている。

姉譲りと言うべきか、あでやかな黒髪を肩にかかる程度に伸ばして、縛ることなく下げている。鋭い目つきとさっぱりした立ち振る舞いから、中学校では男子人気が高い。「一夏、確かトイレットペーパー以外にも何かあつた気がするのだが、なんだつただろうか

「ああ……食器用洗剤だな」

右を歩く幼馴染にして同居人の筈とて、剣道では一夏に負けず劣らず、むしろ喧嘩に近い駆け引きを抜けば間違いなく勝つている。

腰まで伸びた黒髪をボニー・テールに束ねて、紺色のセーラー服についた桜の花びらを払っていた。古風な少女ではあるが、時折見せる気遣いや照れたときのいじらしい反応によつて、中学校では男子人気が高い。

——もつとも、自覚のないだけで、通つてゐる中学校で男子からの視線を最も集めているのは一夏だった。

仲良し三人組の中では二番目の背丈、二番目のスタイルだった。黒髪は短く切り揃え

ようと心がけているが、多忙のせいで時折前髪にかかる程度にやぼつたい。けれど性格が災いした。物おじしない、明るくハキハキとしていて、爛漫な笑みを常に浮かべる少女。

自覚のなさは、想いを伝えられる回数の少なさもある。誰とでも仲の良い一夏相手に、関係が壊れるのを皆恐れた。

最終防衛線の妹と幼馴染が恐ろしいというのもあつただろうが——一人が一夏へ向ける視線は密かに噂になつていた。

「買い出しは私に任せるといい。一夏は今朝アルバイトだつたのだ、家で休んでいろ」「待て。筈だけで買い出しは不安だ。私もついて行く」

「な、お前私をなんだと思つているんだ！」

「じゃじや馬」

「表に出ろ」

妹と幼馴染が、互いに篠ノ之流戦闘術で取つ組み合いを始めた——常人が割つて入ろうとすれば瞬時に全身の関節を極められるだろう。一夏は苦笑いを浮かべたが、疲れているのは事実だつた。

「じゃ、じゃあ、オレは帰るね」

聞こえていなかつた。二人の家族は互いの急所を狙いながら間合いを測つてゐる。

こうなつてはクールビューティーもたおやかさもへつたくれもない。

嘆息して、通学鞄を握りなおして、一人家路を歩く。

織斑一夏は一人称がオレであり、学校では『そこがいい』『私と呼ばせてみたい』両派閥による一年戦争が勃発していた。

ただいま、を声をかけても、返つてくる言葉はない。

一夏は手を洗つてから自室に鞄を放り込む。念のため、他に人がいないか確認した——両親はいても子供と会話しない。姉は仕事に行つていた——高校を卒業してから入つた、メーカー企業。アスリート枠で入社した。織斑千冬はそれだけのスペックがあつた。

自慢の家族だつた。一夏は自分の家族を誇りに思つていた。

たとえそれが、すでに家庭崩壊しきった、元に戻り様のないものだつたとしても。砕けた水晶は決して復元できない。元あつた形を思い出すことができても、それは現実には引き込めない。一夏は嫌というほどにそれを知つていた。

廊下を歩く。床の軋む音が彼にも伝わつてゐるだろう。

狭い狭い物置部屋のドアを、ノックした。

「束さん、いますか？」

「いるぞ」

返事はきちんと返つてきた。

ドアを開いて、中に入る。足の踏み場がないほど乱雑に散らかされた部屋。
落ちつぱなしの紙くずをどけて、座るスペースを確保した。

一夏は膝を抱えて座る。

視線を上げれば、家族の一人がいた。

一夏にとつては兄代わりで、今まさに家を支えてくれてゐる人物で、尊敬する人物。

発明家——篠ノ之束。

名高かつた。宇宙開発における先端技術の開発者。先日、その地位は盤石のものとなつた。大気圏外活動マルチスース『EOS』の発表。

全世界が熱狂をもつて、それを受け入れた。

けれども彼は何も変わっていない。今も、絶望を引きずっている。

「……一夏、もうバイトはしなくてもいいんじゃないか」

「うん。そうだね」

「……剣道、やりたいんだろ」

こういうところ——自分は家族をないがしろにするクズですと露悪的にふるまうくせに、時折気遣いを見せる。一夏は微妙な表情を浮かべた。

「あはは。でもまあ、もう中学二年で、今更っていうのもさ……」

「……すまない」

束は拳を握った。折に触れて彼は、『遅かった』という。何が遅いのだろうと一夏は心底疑問に思う。彼一人で宇宙開発技術は百年進歩したと言われている。

なのに間に合わなかつたと。

「……まだ、これは分かんないの？」

一夏は机に手を伸ばして、置かれていた虹色の鉱物を手に取った。

名称は時^{タイム}_{結^{クリスタル}}晶だつたか。束をもつてしても解析不可能なら、自分にとつては綺麗な石に過ぎない。

壁を見た、随分昔に書きなぐられたメモが、色あせながらも残っている。

もう彼自身の発明によつて紙面上に走り書きをするという行為自体が時代遅れにな

りつつあったが、彼は紙を愛用していた。

① I S コアの製造

② I S アーマー や武装の量子化技術

③ P I C の開発

見ただけでは何も分からぬ言葉だらけだ。

「……三分の一までは来た。こんなに時間をかけて、こんなに遅れてるのに、これだけなんだ」

一夏の視線を追つた東が、自嘲するようにつぶやく。

「7年も遅れている。それなのにまだ、最後の一つはどうしても成功しない……最近はエキスパートへの準備のせいで、本命の研究ができていなかつた。しばらくは、会社のラボに籠るよ」

「……うん、分かつた」

言葉には、何かに迫われているような切羽詰まつた響きがあつた。

こうなつた時、素直に開発の話を聞くのが一番だと一夏は知つていた——東は職人気質で、自分の発明を解説するときは思いつめた様子が少し減退する。

②と③を指さす。

「正直オレ、下二つができるつてだけですぐいことだと思うんだけど……」

「P.I.Cは『EOS』にそのまま流用した——推力を得るためのコンデンサが稼働時間を縛っている。効率化したら何とか30分は稼働できるようになつたが、俺ではそこが限界だ」

「俺ではつて……十分すぎません?」

家族ではあるが、それも込みで、一夏は束に敬意を払っていた。だから敬語が入り混じる。

世界最高峰の頭脳と目されている人間なのだ。そして幼いころから、ずっと見守つてくれていた。

「駄目だよいーちゃん」

「む」

いーちゃんと呼ばれ、一夏は頬を膨らませた。

「オレ、もう中二ですよ」

「……いーちゃん、ダメか?」

「う……ダメじゃ、ないですけど」

弱り切つたその瞳に見つめられると、大抵のことは断り切れない。

お前は押しに弱すぎるのをなんとかしようと、多くの友人から忠告されているのを思い出した。事実だった。そして、変えようのない気質でもあつた。

「家族、なんだ……まあ俺みたいなクズが家族じや、うれしくないだろうけど」「そんなことない！」

一夏は立ち上がりつた。束が驚いてこちらを見る。

一夏は束の隈も、伸びっぱなしの髪も、白い肌も、好きだつた。本人が一番、それらを嫌つていた。

「いやでも、ほら……な？」

「父さんと母さんだつて、喜んでるよ……テレビで録画してたんだよ、昨日のエキスポ」驚愕に、束の瞳が見開かれる。

かつて職をあつせんした、してしまつた時から、両親と会話はできていない。食卓にも行つていない。部屋か、デュノア社のラボに閉じこもる日々。コミュニケーションを取る相手は決まつて、一夏か、遅くに帰宅した後の千冬だつた。筈とマドカには何故か敵視されていた。

「だから大丈夫だよ束さん、怖がらなくていいから」

「……うん、そつか。ああ、そつか……」

涙を浮かべ、束は床に膝をついた。一夏の低い身長でも胸元に頭があつた。ぎゅつと抱きしめる。

一夏は『この人はオレがついてないと』と前から思つていた——そのことを食卓で漏

らした時、両親は半眼で天井を睨んだ。千冬はお茶を噴きだした後、寄りにも寄つてそこが遺伝するのかと低い声でつぶやいた。箸とマドカは箸をへし折つて、思えばその時以来束を敵視している。

部屋に沈黙が訪れた。一夏は自らを省みた——女子中学生が成人男性を抱きしめている。恐らくこの光景がばれたら、束の地位は終わる。

「ほ、ほら！　じゃあP—I—Cって説明してよ！」

がばつと束を引きはがす。

少し名残惜しそうな表情を浮かべる成人男性に、もう一度抱きしめてあげたい欲求がわいて出るのを必死にこらえた。

「うん、分かつたよ。……ええと、いーちゃんは慣性つて分かる？」

「分かんない！」

「説明やめます」

束は視線を下げて、顔に影を落とした。妹の馬鹿さに完全に絶望していた。

慌てて一夏は両手を突き出す。

「た、たんま！　オレだつて言葉は聞いたことがあるし、イメージはある！　でも説明し

ろつて言わると難しいんだ！」

「んーじやああれだな、静止する物体は力のつり合いが取れている状態だ、っていうのは

「ピンと来る？」

「そりや、まあ。じゃないとどこかに動いちやうでしょ」

「そうだよな。P I Cの基本的な原理はそれだ」

束はモニターを表示した。

ウインドウ上ではISを身にまとつた人間が一人描かれ、真上から矢印に刺されてい
る。

「この矢印は何だと思う？」

「……重力、とか」

「正解だ」

手が伸びてきて、髪をかき回された。くすぐつたくも心地よく、一夏は目を細める。

「重力がある限り空を飛ぶことはできない。そこでP I Cは電力を消費して、搭乗者の周囲に力場を作つている——かつての俺は推力を生み出すことに囚われていた。推力でなくていいんだ。押し上げるのではなく引き上げるイメージで、P I Cが指定する座標の空間に局所的なブラックホールもどきを発生させて、引力を発生させる。標準数値としてそれを地球の引力に設定しておけば物体は静止する。その上で行きたい方向に同じ現象を起こせば、静止した物体は慣性のみで動くことが可能だ。止まる時も、進行方向と逆に同じ現象を発生させる。細やかなカーブには熟練した技術が必要だけど、そ

のあたりは人間の感覚を機械が数式化するようプログラムしているから割と感覚的に動かせる。とはいえるけれども、『EOS』の慣熟訓練には平均して一ヶ月かかるつてしまつた……本当はもつと手早くできるようなものののはずなんだが、やはり本家とは違う理屈で組み上げてしまつたんだろうな……」

一夏は——途中で理解するのをやめていた。

あどけない顔がぼけーっとしている。話が終わつたのを確認して、緩やかに笑みを浮かべた。

「やつぱり東さんはすごいな！」

「……聞いてなかつただろ」

半眼で睨まれ、一夏は即座に顔をそむけた。

「で、まあいい。次の量子化技術は、まあ正直実現できていない」

「あれ？ でも横線引いてるじやん」

「理論上は可能なんだ——①の、コア製造に付随する形で完成する」

束はそこで、一夏がずっと手で弄んでいた時結晶を見た。

「問題はそいつなんだよね。実験を繰り返して分かつたのは、そいつは刺激を与えるとランダムに異空間とアクセスする」

「は？」

科学の話が突然スパロボの話になつた。

一夏は目を丸くする。

「本當だ。ここではない世界のどこかへアクセスできる——エネルギーの嵐が荒れ狂う世界だ。次元の裏側と便宜上呼んでいる。今俺たちが生きる世界は、様々なエネルギーが形を取つてゐる世界だ。俺もいーちゃんも、もとをただしていけばエネルギーの塊だ。それがある時は流動体に、ある時は固形物になりながら、世界を回している。だが時結晶のアクセスする世界はそれが形を取つていない」

「…………ジオストームみたいな感じ？」

「見ていい頭の悪い映画はシャークネードだけだと言つただろ」

例えが抜群に最悪で、思わず束は嘆息する。

「だが、時結晶を介するアクセスはあまりに不安定なんだ。現状、時結晶の質の良し悪しそらも、俺たちには判別できない」

「そつか……」

一夏は説明を終え、隣に座る東の肩に頭を乗せた。よくやる姿勢だつた。姉妹揃つて、人の肩を枕にするのが好きだなど束は思う。

「……いつか、できるようになるよ」

「……そう、だな」

いつか。その言葉に束が表情をしかめた。

けれど一夏は、それをを見なかつたふりをした。大好きな家族の温もりがあれば、彼女にとつては、それだけで十分だつた。

デュノア社日本支社。気鋭の発明家専用に設けられたラボに、一人の男がやつて來た。

デュノア社現CEOにして、最新型大気圏外活動用マルチスース『EOS』により一躍企業規模を拡大した傑物、アルベル・デュノア。

すらりとした長身と上品なスリーピーススース、流暢な日本語。しかし雰囲気は鋭利で、重ねただけで身震いしてしまうほど冷たい視線。近寄りがたい男である。辣腕も相まって、尊敬というより、畏怖される存在だつた。

日本支社まで足を延ばした彼は、篠ノ之東専用となつてゐるラボに入り、仮眠用ベッドに腰かけてゐる。

作業机には一つの時結晶と、それに対してあらゆる刺激を与えるための機材、機材から伸びるマニユピレータがあつた。束は数値を打ち込んでは反応を仔細観察し、事細かに分析していく。

アルベールは部屋に入つてからずっと押し黙つていた。束は彼のことが嫌いではなかつた。必要なものは惜しみなくくれる。あつせんの件を断つてしまつたというのに、気にするなど流してくれた。

時代の傑物が二人いる部屋で、片割れにしてまさに今世界の経済を牛耳ろうとする男は、今――

「…………娘が…………反抗期なんだ…………」

空気汚染機と化して、濁つたため息を吐き出し続けていた。

束は眼球保護用のシールドマスクを外して振り返つた。表情は苦いものだつた。

「…………前話してた娘さん、ですよね」

「シャルロット……おお、私のシャルロットが……洗濯物は別にしてくれと……ツツ!!」

不本意ながらも、束は彼女を知つて――ライトイノベルの登場人物として。
I Sがなければこうも変わらぬのかと呆れてしまう。親ばかと反抗期の娘。両手で顔

を覆つて天を仰ぐアルベールの姿は、滑稽であり、しかし束にとつては微笑ましい光景だつた。

「まあまあ、いいじゃないですか、もう少ししたらきっと親心を分かつてくれますよ」

そもそもテメエ家庭崩壊してる人間の前でよくもまあそんなことが言えるな、とは口に出さない。

「——もう少ししたら？」

「ええ。きっとうまくいきますよ」

「——もう少ししたら、まさか……、恋人とか連れてくるのか……!?」

「話聞いてなかつたのか？」

顔面を劇画調にして、アルベールがベッドから床に崩れ落ちる。

束は冷めた目でそれを見ていた——が、不意に閃く。

「……え？ あれ？ 中学生ぐらいですよね娘さん。それでもう少ししたら恋人……？」

？」

いる。身の回りに中学生ぐらいの娘が三人もいる。

「——アルベルさん。娘さんが恋人を連れてきたら、どうします？ 今のうちに考えておきません？」

「……そうだな。君も家族に、シャルロットと同い年の少女が三人もいたな」

二人の男は立ち上がり、視線を交わした。
優しい笑みを浮かべて、仮想の、自分の家族に引っ付いてきたおぞましい虫ケラを想定した。

『むごたらしく殺す』

意見は一致した。二人は満面の笑みで互いの手を握る。

「デュノア社が全面的に協力する」

「死体を完全に融解させる発明しておきますね」

「世界よ、これが時代をけん引する逸材二名である。

「……こんな奴らが変革を起こそうとしている世界なんて、滅びればいい」

声が聞こえた——顔をむければ、ラボの入り口に死んだ目の織斑千冬が立っていた。

「あれ、ちーちゃん？ 珍しいね」

「今日は午前で練習が切り上げだつたんだ——根を詰めているだろうから差し入れでもと思つたが、一体全体何の話をしている……」

背中に下がった黒髪を乱暴に揺らして、千冬がラボの中に入つて来る。

そして千冬の背を追うようにして、一夏も歩いてきた。視線はまつすぐ東に向けられている。

「いーちゃんも来てたのか。安心してくれ、いーちゃんに彼氏ができたらちゃんと挨拶

するよ。無事に帰すかは考えてないけど」

「——絶対ないから」

断固とした口調だった。

「彼氏を、東さんに会わせるとか、あり得ないから」

「……」

「東——東？ おいッ！ こいつ呼吸が止まってるぞ!?」

千冬が素早く頬を張つた。立つたまま絶命しかけていた東は、ハツと意識を取り戻す。

「や、やべ、ほぼ逝きかけた……うん……まあそうだよな、家族つつてもこんなクズに彼氏会わせても恥ずかしいだけだもんな……ふふ……」

「しつかりしたまえ！ 傷は深いぞ！」

「アルベル社長、煽らないでいただけますか!?」

「……そういう意味じゃないんだけど、な」

一夏の拗ねたようなつぶやきは、東の蘇生作業の喧騒に呑まれて消えた。

千冬は差し入れにシュークリームを持ってきていた。

六個あつたそれを、束は糖分補給という名目で速やかに三つ食べた。食い意地の張つた年上の男性を一夏が冷めた目で見る。先ほどの発言が想起され、束は心停止を起こしかけた。千冬が足を思い切り踏んでこなければ再び三途の川を見ていただろう。

シュークリームの箱を、千冬はおずおずとアルベルにも差し出した。話したことはあまりないが、現状、篠ノ之家がやつていているのは彼が束を見出したからだ。つまり、恩人と言えた。

アルベルは礼を言つてからシュークリームを手に取つた。

一口かじり、頷く。

「妻の作った方が美味い」

「お前もう食べんな」

束は最近、彼に敬語を使わなくなりつつあつた――人に対しても敬語を使わないことを彼は意識し始めていた。

かつての情念がよみがえつているのだ。彼女のようにありたい。彼女のようにでなければならぬ。強迫観念は薄れようとも、決して死滅したりはしなかつた。

「あ、そうだ。束さん、これ忘れてたよ」

一夏がポケットから、素手で掴み取つて差し出した——時結晶。

アルベールは冷や汗を流す束をねめつけた。

「……一応これは、貴重なものなんだが」

「……俺にとつては一夏の方が大切なんで……」

言い訳のダシにされているとは分かつたが、一夏は耳が赤くなるのを自覚した。束は完全に彼女の好意を知っていた——家族愛だとそれ違つていた。瞳から算出できる感情はあくまで数値のようなもので、解釈は束自身にゆだねられている。

「にしても時結晶が二つ揃うなんて、壯観だな」

作業机に置いていた時結晶も手に取つて、束は両手にそれぞれ時結晶を持つ。あと一つあつたらお手玉ができるなど言いたくなつたが、これ以上アルベールからの信頼を失いたくなかつたのでやめた。

その時。

束はふと気まぐれを起こした。

手慰みに近かつた。

左右の手に持つ時結晶。

それらを互いに、軽くこつんとぶつけた——

スパーク。閃光。咄嗟に取りこぼして、目を庇う。

視界が潰されたのは一瞬だった。全員目を庇った手を下ろして、東を見た。

「…………はははははははは」

彼は笑っていた——地面に落ちた二つの鉱物を拾い上げた。

「はは、はっはっはっはっは！ アハハハハハツ！ そうかそうかそういうことかよ！」

ああ、畜生なんで気づかなかつた！」

彼は天災ではなかつた——だが、天才だつた。

眼前で起きた現象を理解して、分析することが可能だつた。

生來のスペックはその現象の理屈を暴き、解き明かし、再構成し、結論をはじき出す。作業机に飛びついた。二つの時結晶を並べ、固定する。その様子を全員、固唾をのんで見守つていた。

既に無数の数式と図が東の脳内を縦横無尽に駆け回つてゐる。それらを一度に把握し、順序だてる必要もなしに理解する。

天才の頭脳は——未知の現象を自ら引き起こすことはできない。だが理解することができた。

「そうか、双向！　ああそうか……一方的に引き出そうとするから駄目だつたんだ。未知の世界に目がくらんでいた。アクセスするんじやない、アクセスさせるんだ。つり合いを取れるようになんて言つてた俺が、それをおいがしろにしていた！」

興奮から思考がそのまま唇を突き破つて飛び出す。

時結晶が輝きを放つ。束は素早く、作業机を特殊な力場として再設定し、太いケーブルを引っ張り出した。大気中のエネルギーを吸収、ラボの隅に置かれた『EOS』へ接続する。そのケーブルを何本も同様に並べた。

様子を見ていたアルベールの呼吸が乱れる。千冬も冷静ではいられなかつた。ただ一人。

一夏だけが——安心しきつた表情で、はしやぐ束の背中を見つめていた。

「いま……世界が、変わろうとしている、のか」
アルベールは呻いた。

「束、ついに、お前は」
千冬はつぶやいた。

「束さん……」

一夏は両手で胸元を握つた。

誰もが知つてゐる。篠ノ之東は天才である。

それは卓越したスペック、生まれつきのものが大きな要因としてある。

ここで、論理を逆転させてみよう。

一人の天才が彼にとつての篠ノ之東として足りうるには、何が必要か。
頭脳は、足りていた。

発想力は、足りていなかつた。

天才は、天災ではなかつた。

しかし——しかし！

ここにもう一つ、天才が天災でなくとも、篠ノ之東たり得る理由が一つあつた。

彼は、完成形を知つていた。

発想力によつて導き出される終わりの形を、あらかじめ知つてゐるという反則技。
それが天災の思考回路を有さずとも、不可能を可能にする。

「来た、来た、来た——！」

東が天を抱きしめるように、両手を広げた。

同時にエネルギーの奔流が『EOS』へと流れ込む。人間の身体を保護するEOS

アーマーの隙間から、過剰エネルギーが稻妻となつて迸り壁や床を焼く。思わず全員が一步下がり、対照的に束は一步踏み出した。

「これ、がッ」

アルベール・デュノアも、織斑千冬も、織斑一夏も、それを知っていた。

「ああそだ、そだ！ これが、これこそが！」

篠ノ之東は至上の幸福に全身を震わせた。

「君の名は——」

——インフィニット・ストラトス！

直後、過剰エネルギーの雷が束の全身を焼いた。

「は？」

千冬が絶句し、アルベールが咄嗟に作業机からケーブルを切り離す。発光していた『EOS』から光が失われ、部屋が元に戻る。

全身からぷすぶすと煙を上げる束が振り向く——髪がアフロになっていた。

「束さん……」

一夏は祈るようにして両手を解いて、世紀の瞬間に世紀の珍プレーをかました成人男性を見つめた。ゴミを見る目だつた。

「……い、いや、ほら、俺ってこいつのママみたいなもんだし、避けてくれるかなつて……あと世界が俺を中心に回っているなら、なんかいい感じに演出で避けてくれるかなつて……」

「分かつてはいたが……君は……馬鹿だ」

アルベールが眉間に指をあてながら、苦い声を出した。

実験は成功したのだが、まったくもつて締まらない。アフロを千冬が物珍しそうにわしゃわしゃしているのを無視して、束は実験机に置いた時結晶二つを見た。

「いや、これはまったく盲点だった。いーちゃん、君は幸運の女神だな」

「え、えへへ？ そうかな？」

悪い気はせず、一夏は短髪をしてしてしと叩く。

千冬は面白くなさそうにアフロを引っ張りだした。

「実験としてレポートをまとめてくれ。いや、防護壁を造つてからもう一度エネルギーを流すべきだろう……私も付き添つていいか？」

「勿論です。社長がいてくださったから、ここまで来れましたから」

男二人は力強い視線を交わした——世界に変革を巻き起こせるという確信があつた。

コアを製造した以上、もはや問題点は全てクリアされた。一つのコアにつき二つの時結晶。なるほど、これは大量生産は難しい。だが希望はある。

「安定供給ができれば、向こう側とのパスが安定するということ。それを元に……時結晶に寄らないアクセスも考案できるかと」

「……來た。私ははずつと、この瞬間を待つっていたぞ。あの時君に声をかけたのは、間違いではなかつた……！」

アルベルが鼻息荒く束の肩を掴んだ。

「これならきつと……シャルロットも私を見直してくれるに違いない……！」

「もつと他にあんだけ」

最悪な発言——束はげんなりと声を上げた。

「うお、髪が元に戻つたぞ」

まるで意に介さずアフロをずっと触っていた千冬が声を上げる。

世紀の大発明の瞬間に居合わせた人々は、ありえないぐらいマイペースだつた。

「あはは……じゃあ、オレはそろそろ帰るね。千冬姉は？」

「ん、少し、残ろうかと思う」

「そつか」

一夏は荷物を手に持つた。

「裏口を使いたまえ。君なら顔を見せればパスできるはずだ。家の近くまでSPが護衛する」

「ど、どうも」

当然の配慮だが、一市民である一夏にとつては慣れない。何度もラボを訪れるたびに護衛され、なんだか自分が高等な人種だと言い含められているようで、気後れした。

一夏がラボを立ち去る。

アルベールはせわしなくラボを歩き回っている。

束と千冬は、ベッドに腰かけた。

「……やつたな」

「……うん。ありがとう、ちーちゃん」

「私は何も」

「いてくれただろ——不幸を、分かち合つてくれた」

千冬は隣に座る男の顔を見た。

いつか見た、そして、気づけばまつたく見なくなっていた——自信に満ちた笑み。

「だから、これからは幸福を分かち合つていこう」

「……東」

「ありがとう、ちーちゃん」

自然と、ベッドの上で千冬と東の手が重ねられた。

恥ずかしがつているのか、東は伸びた前髪をもう片方の手で弄り始める。

唐突に、千冬の胸の中で、感情が爆発しそうになつた。

抱きしめたい。口づけしたい。ずっと応援していた男が、ついに夢を叶えてみせた。

それは——千冬にとつても至上の幸福だつた。彼の喜びは彼女の喜びでもあつた。既に千冬は自身の感情を理解していた。意図して隠していた。東相手にも隠し通せるのは、彼女がデザインされた究極の人類だつたからだ。感情の殺し方を分かつていた。好意は時として重荷になる。そう思つて、今まで、親身な家族として接していた。

(…………もう、いいよ、な?)

でももうだめだ抑えきれない。目の前にいる彼が愛しくて仕方がない。自分を救つ

てくれた恩人。どんな逆境でも夢に伸ばす手だけは絶対に下ろさなかつた、狂人——狂つていると誰が言おうとも、そこが、千冬には眩しく見えた。

「……なあ、束」

「うん？」——ツ

意図して、千冬は自身の感情をさらけ出した。

視線が重なつた瞬間に束は身体を固くした。感情が読める。読めている。

耳まで真つ赤になつていく。言葉に寄らない、ある種の告白。けれど千冬は、その上できちんと、言葉にしようと思つた。

顔をすいと寄せる。束は身体ごと引き下がろうとしたが、重ねた手を杭のようにして逃がさない。

互いの吐息が感じられるような距離になつた。間近に見える瞳には、頬を上気させた自身の貌が映つていて。息を吸つた。

視界の隅でこつちをめつちやチラチラ見ながら拳動不審になつてゐるアルベルは無視した。

「束」

「あ、う、ちーちゃん？ その、俺……」

「束、聞いてくれ」

覚悟を決めた。

「私は……」

「……ツ」

「わた、し、は――」

決定的な瞬間だつた。

分岐点だつた。

「失礼しますツツ!!」

刹那。闖入者。空気ががらりと変わる。重なつていた手が、外れた。

血相を変えた様子の研究員が、ラボに飛び込んできた。

どうした、と一同の視線を受けて、その研究員は焦りに空回る甲高い声を上げる。

急：天才の末路

「おつ、織斑一夏さんが誘拐されたと――！」

運命というものは、既定のレールである。

一人一人に運命がある。

そして、それを進む速度は決められていない。
だから。

篠ノ之東にとっての運命が遅れても――織斑一夏にとっての運命が速度を合わせてくれることなんて、ない。

「——S.Pは何をやつていたアアツ！」

最初に反応したのは、最も人生経験を積んでいた男。

アルベールの怒号が響き渡る。研究員は身を縮こまらせた。

「そそそれが、裏をかかれたと——」

「——計画犯行かッ。おのれえつ、複数のルートをランダムに取っていたのではないのかッ！」

「恐らく、一つのルートに絞つて、それを取る時を待つていたのかとつ」

アルベールがいら立ちに地団太を踏む。

「追跡は！」

「G.P.S.が外されています、目視追跡中ですが、今にも振り切られそุดだと」

千冬は絶句していた。手が震えている。

そつと、隣を見た。

口をぽかんと開けたままの、篠ノ之束。ゆつくりと彼の口が、つり上がる。

「……あ、は」

先ほどの嘲笑とは真反対の。

千冬にとつては見慣れた、見慣れてしまつた。

何もかもを諦めたような、笑みだつた。

「はははは……そつか。ああ、俺のせい、だよね」

「ち、違う！」

千冬は声を荒げたが、同時に否定する声は震えた。

違う——わけがない。このタイミング。デュノア社の裏口から出てきた、護衛を引き連れた少女をさらう。デュノア社といえば、もう、『EOS』だ。

「東君。落ち着いてくれ。君のせいじやない。君の大切な家族は我々がすぐに連れ戻す」

「ああ、無理ですよ」

呆気なく言われた。アルベルは目を見開いた。

「多分そう決まってるんだ。なんだ、ああ、また俺間に合わなかつた——違う。ずっと間に合つてなかつた。一度も、きちんとやり遂げられたことなんてなかつたのか。あはは、はははははははは」

笑いながら立ち上がつた。東は作業机に置いた時結晶を手に持つた。

外装のみ完成していた、机の隅に置かれたコアに、それを入れ込む。

「——待て。動くな。それ以上動くんじゃない」

「たば、ね？」

顔見知り二人が彼の名を呼んだ。遠く聞こえた。

何もかもがどうでもよかつた。必死にたどり着いた最後の結末は、あまりにも遅すぎた。運命は彼を待つてくれなかつた。知らずの内に、涙がこぼれそうになる。あんまりだ。死力を尽くして、血反吐を吐いて、人生を捧げた——結果、遅れが手痛いしつペ返しになつた。

すっかり泣き虫になつちやつたな、と、束は他人事のように、自分の頬を伝う涙を感じた。

「待て、待つんだ——」

静止しようと駆け寄るアルベールはもう間に合わない。

束が実験用『EOS』の、空洞だつたコア部分に、ISコアを埋め込み、同時に自身も乗り込んだ。

本来なら彼女なんだろうな、と千冬を見た。でも駄目だ。彼女は家庭のため、『IS』はおろか『EOS』の搭乗もしたことがない。

この場にいる、否、全世界の中で最も『EOS』の操作に慣熟していたのは、束だった。

「起動しろ」

創造主の命令を受けて、鋼鉄の鎧が熱を持つ。放出される過剰エネルギーの稲妻に、

アルベールは近づくことを許されない。

「束、待て、待つてくれ！ そんなことをしてはいけない——！」

「ごめんよ、ちーちゃん。俺のせいなんだ。だから俺が、ちゃんとやらなきやいけないんだ」

PIC起動。完全な静止状態になる。

コアから、二つの時結晶が作用して開かれた異空間への経路から、膨大なエネルギーが流れ込む。

視界が拡張された——束は四肢の動きを素早く確認した。
エネルギーを流し込んだスラスターが、炎を噴き出した。

爆発的な推進力と、搭乗者を守るバリヤーを威力に代えて、束はラボの壁を突き破つて空へと躍り出た。轟音に誰もが動きを止め、見上げた。空に浮かぶ一点の黒。試作型『EOS』は全身黒かつた。まだ『白騎士』ではないから、カラーを選択した。運命を果たせなかつた自分には、真逆の色がふさわしかつたのかなと、今になつて束は思う。

『EOS』のコンピュータからデュノア社へアクセスした。半ばハッキングに近い。織斑一夏を奪還するためにひつきりなしに行き交う通信を把握し、マッピングして空間投影ウインドウに浮かべる。

暗い焰が瞳に灯つた。

加速する身体が空を裂く音。

人生を懸けた夢が潰れる音。

積み上げてきた物を碎く音。

束は涙を流しながら、大空へと羽ばたく。

——織斑一夏は無傷で生還した。車に連れ込まれた際に多少の擦り傷を負つていたが、それ以上の負傷はなかつた。誘拐犯らのアジトまで着いていれば、どんな目に遭つていたかは想像に難くない。そうはならなかつた。悲劇は未然に防がれた。

「……だから、良かつたんだ……」

冷たい独房の中で、束は独り言ちる。

開発した『インフィニット・ストラトラス』の、その危険性を自ら証明した。

誘拐犯の車を腕力で無理矢理停め、誘拐犯を全員引きずり出して叩きのめした。殺しはしなかつた。

確かにそれは、英雄の美談となり得る。

だがそれ以上に、発揮された開発品の危険性——否。正確な言い方。兵器としての有用性に、誰もが閉口した。

デュノア社は極秘開発していたその兵器に関して、非難を受けていた。束は自らを取り調べる男性から、ニヤついた笑みと共に、フラツシユを焚かれながらアルベルが頭を下げる映像を見せられた。

歯を食いしばった。悲しいというよりも、怒りが勝つた。

今度こそ——今度こそ届いた。天災の領域に片手が届いた。でもだめだつた。天災のようにはならなかつた、できなかつた。全部失つた。

危険なマッドサイエンティスト。それは両者共通だつた。けれど天災は、その上で自由に立ち回つたし、家族を離散させたがおおよそ狙い通りの展開を引き起こした。世界を掌の上で弄んで見せた。

自分は、どうだ。世界の掌の上で弄ばれ、無力を思い知らされ、絶望している。

「……篠ノ之東。面会だ」

「……面会禁止じやなかつたのか」

「お前が寝ている間にも、世界は動いているんだよ」

普段自分を嘲っている——その嘲りが恐怖の裏返しであることに束は気づいていたから、とやかくは言わなかつた——男が、珍しく疲れた声で束を呼んだ。

薄いベッドから身体を起し、隣の男に付き添われながら廊下を歩く。ここがどこだか、よく分かつていない。ひとまず日本の警察組織に身柄を拘束されて、それから何度か移動を繰り返していた。日本にいることだけは確かだつた。

面会室に入った。呻いた。強化ガラス越しに、見知った少女が座つていた。

「……いーちゃん」

織斑一夏の顔に霸氣はなかつた。

互いにそだつた。椅子に座ると、男が後ろに立つた。

「……束さん、元気?」

「……あんまり」

「そりや、そつか」

束は注視した——顔色は悪い。着て いる制服からして、学校帰りだらうか。そもそも自分が拘束されてどれほどだらうか。

「あのね、オレは、束さんを説得しろつて、知らない人に言われて」

「知らない人……国連か？」

「多分……そうだと思う」

「それで、学校帰りにわざわざ」

「あ…………」

違う。東は察した。学校帰りではない。ならば正装の代わりとしての制服？ 否、頭脳が回転する――

「――俺が、拘束されてから、何か月だつけ？」

「もう、半年だよ」

そんなに経っていたのか――待て。天才の思考が加速する。

半年？ その間何があつた？

何もなかつた。

「ゞ、ゞめんね。これ以外、服がなくなつてて、ぼろぼろになつちやうし、よく……やめる。

なんだ、それは。

服がない――半年間、篠ノ之家には、かつて東が稼いでいた金が入つていない。

ぼろぼろに――東は世紀のマツドサイエンティスト。その家族。学校。犯罪者の家族。

すべてがつながり、束は放心した。
今度こそ、もう、だめだつた。

自分の心が折れる音が聞こえた。

「……せつとく、つて？」

魂の抜けたような声。

一夏は首を傾げつつも、言葉を続ける。

「あのね、ISの技術——ああ、インフィニット・ストラトスだから、略称はISなんだ
けど。その技術をどうするかつて」

現状コアを造るのは束だけだ。確かに原材料は判明したが、その出力を安定させる
数式は束の脳内にのみ存在する。

天災を諦められない頃だつたら。

それは一筋の光明に見えただろう。

逆転の目に見えただろう。
けれど。

急：天才の末路

「どうでもいい」

「え？」

急：天■の■路

「もう、どうでもいいや」

「……東さん」

■ : ■ ■ の ■ ■

「俺は天災なんかじやなかつた。俺はどうしようもないクズだ。でも、いーちゃんを守ることだけはできた。それでいいんだ。だからもう、何もいらない」
「……分かつた」

篠ノ之東は。

ISの技術を全て、
捨てた。

e p i : 転生したら天災（♂）だつたし一夏は一夏ちやんだしハーレムフルチャンやんけ!!

月面で、人々は固唾をのんでその瞬間を待っていた。

地球で、人類は呼吸すら忘れてその瞬間を待っていた。

グリニッジ天文台を基準とする世界標準時が、一秒を刻む。

西暦の年度が移り変わる刹那が、ボーダーライン。

そこで、切り替わる。

「——長い時を過ぎててきた」

ここは月面。酸素のない、生物の存在しない空間。
の、はずだつた。

設置されたパーテイー会場に屋上はなく、見上げれば青い地球を視認できる。

誰もが、まるで地球上を歩いているような感覚で、重力も空気も関係なしに、その場に私服姿で佇んでいた。

全員が、I.Sを装着し、装甲を開せずその場にいるが故の光景だつた。

「人類は地球の上で、繁栄を得た——そして、次のステップの前に、長い時が流れた」
 パーティー会場の前方、豪奢な演説台に立つ壯年の男が、肅々と告げる。

それは祝福の言葉だった。

それは歓喜の台詞だった。

「今我々は、時代を創ることを約束しよう。繁栄を、長きにわたる平和を約束しよう。この場にいる人々——月と地球、全ての場所に生きる人々で、新たな時代を創ることを、約束しよう」

男はそこで、腕時計を見た。

娘から誕生日に送られた、小さくチャチな時計。何物にも勝る価値があつた。これを巻いて、革新の時の中心にいることは、彼にとつての誇りだつた。

一秒、刻まれた。皆が息をのんだ。

あと——五秒。男は意を決した。

「宣言しよう——宇宙歴史の始まりを！」

言葉が終わると同時に——アラーム。鐘の音だつた。時代を告げる音色だつた。月と地球。そこにいる全人類が、ワッと声を上げた。

喜びの時。祝福の時。皆が手をつないで、揃つて一步、新時代へと踏み出した。教科書に未来永劫載せられるであろう偉業が、そこに刻まれる。

「では……皆さんご歓談の前に。この時代を切り開いた青年に、語つていただきましょう」

誰もがそれを期待していた。

壇上の男は、パーティー会場の一角で壁に背を預けていた青年を見た。ドレスを着飾った女性たちに囲まれる彼。無二の親友と思つていた。相棒だつた。志を共にした戦友だつた。今や、彼の理想は世界を塗り替えてみせた。

―― そうして視線を向けられた俺、篠ノ之東は、全身から冷や汗が止まらなかつた。

「ふふ……呼ばれているぞ、東」

隣で俺の左腕に自分の右腕を絡みつかせていたちーちゃんが、耳に息を吹き込むような距離で囁く。

ちーちゃん、織斑千冬。

否である。

今の彼女は篠ノ之千冬。

もうそのままズバリ、俺の奥さんだつた。

愛する妻の言葉であつても、俺の脳がいまいち動き出さない。

完全にバグつていた。

「待つて、くれ。実はまだ整理が追いついていない。いや、時間をくれ——何がどうしてこうなつている？　もうおれ何もわかんない」

「もう束さん、しつかりしてよ」

俺の右腕に自分の左腕を絡みつかせていたい一ちゃんが、俺の顔を下から覗き込む。胸元に切り込みの入つたドレスでそんな姿勢をするんじやない！

いーちゃんは俺と一ちゃんの住む家に転がり込んでいた。本気で俺を狙つているらしい。よく二人でけんかしている。大乱闘織斑シスターーズである。

というか学校でいじめられたりしてなかつた。貧乏ではあつたが、父さんと母さんが奮起した——父さんがアルベル社長に土下座して、雇つてくれと額を床にこすり付けた。スキヤンダルの最中の企業ではあつたが、社長は俺への義理と、父さんの目に、入社を受け入れた。テストをパスして父さんは勤め人となり、俺のいない間ずつと篠ノ之家を支えた。

学校では俺というナイトがいーちゃんという姫を助けた話として、よく揶揄われてい

たらしい。面会室で元気がなかつたのがそれのせいだと知つた時、俺は崩れ落ちた。独り相撲だつた。

「ほう。やはり世紀の大天才は女を侍らせて大層なご身分だな」

「本当にな。一夏を侍らせる兄さんは嫌いだ……」

「大体一夏、ちよつとくつつき過ぎなによあんた！」

「まあまあ鈴さん、落ち着きましよう。東博士をなき者にすれば済む話ですわ」

「ちょ、ちよつとやめてよセシリ亞。お父さんが悲しむから、男として再起不能ぐらいでいいでしょ？」

「シャルロット……お前が一番えぐいことを言つてゐるぞ……」

眼前にはマドカと、箒と——セシリ亞・オルコットと鳳鈴音とシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィッヒが、そろいもそろつて俺を殺氣全開の目で睨んでいた。頭が痛い。もう何も分からん。

ええとだな。

俺が捨てたI-Sの技術は——捨てた、うん、捨てた。

要是全世界に全容を公開した——それだけだ。

俺は世界の英雄になつた。はあああああああ!?

意味わづかんねーんだけどお！ 結局コア俺が造りまくつたし学園作つて宇宙開発

用のエリート人材育成に注力したよ！ そりやあ！ でも贖罪っていうかやけっぱちつていうかさあ……何だよこれエ？！

一期生として一夏、マドカ、篠が入学して……そしてどうなったと思う？ ん？ これ俺もマジでりえねえと思うんだけどさ。

なんかハイスピード学園ラブコメ『IS ヘインフィニット・ストラトス』が始まりやがった。

運命は俺を待つてはくれなかつた。

けれど、確かに運命は存在する。

だからこそ、最終的には俺の知る道筋へと収束していく——いやいやいやいやいや！？ もうビビり倒しましたけどお！？

一夏はそこで同級生ら相手にフラグを立てまくつて、まあ、結果として……原作ヒロインズから常に命を狙われています。

みんな俺のことを好き勝手罵っている。ネクラ、元引きこもり、テンション上がるとき声がでかい、云々。

特に篠ちゃんはひどい。俺のことを未成年に手を出したゴミと蔑んでいる。

……あれ？ 全部、自業自得だな！？

「……篠ノ之東博士、壇上へどうぞ」

アルベル社長が引きつった顔で俺を催促する。
でもきっと、俺の方が顔面引きつってるよ。

「——なあ、ちーちゃん」

歩き出そうとして、両腕にしがみつく二人の腕を解いて。

ふと、俺はちーちゃんと振り返った。

もう、かのじよ天災である必要はなくなつたけど。そんな役割は消し飛んで、俺の全然知らな
い世界になつちやつたけど。

誰かが、それをちゃんと聞けと、俺に言つたような気がした。

「今世界は楽しい？」

ちーちゃんは一瞬呆気に取られて。

けれど。即座に——満面の笑みを浮かべて、俺の胸に飛び込んできた。

「ああ、最高に——楽しくて、幸せだ」

唇が寄せられる。全世界中継の最中。

一夏の悲鳴が響く。会場中が歎声に包まれる。地球の人々が口笛を吹く。アルベル

ル社長が視界の隅でこつちをめつちやチラチラ見ながら拳銃不審になつてゐる。

俺は唇に感じる温もりを享受して、笑つた。

天才の末路としては、上等すぎるな、と思ひながら。